# 障害のある人の表現と鑑賞をめぐる連続講演

リベルテ アーツカレッジ 2018

## CONTENTS

リベルテアーツカレッジとは?
奥付

PART1. 2018.07.22

【見ること】
参加者感想
アンケート集計

漫画「みることとよむこと」 作:S.S.G、嘉澄幸村

PART2. 2018.09.22

【読むこと】
アンケート集計
まとめ

開催概要

## リベルテアーツカレッジとは?

リベルテは2013年に、障害のある人たちとともに「何気ない自由」や「権利」を尊重していける社会や人、関係づくりを行うことを目指し設立しました。さまざまな表現を通じて仕事や居場所づくりを行う福祉事業と合わせて、社会に発信する文化事業を行っています。これまでに、上田市柳町通りの店舗を使った障害のある人の作品展「GOOD MEETS ART街道」（2014～2015）や「福祉のデザインとアートで障害のある人の『しごと』を考える事業」として展示会やトークイベントを開催（2015～2018）してきました。2018年度の事業から「リベルテアーツカレッジ」というタイトルで企画を行いました。

近年、障害のある人や独自のルールをもとに創作し続けている人など、芸術や美術として美術館やメディアで積極的に取り上げられることが少なかった表現活動や作品などが、注目を集めるようになってきています。その背景には2020年に行われるオリンピックやパラリンピックが、障害のある人の芸術活動を応援し、発表やその取組を後押ししていることも関係しているかもしれません。そうした全国的な盛り上がりの中で、改めて障害のある人の表現や作品の鑑賞や批評をすることについて、街の人たちと考える機会を目指しました。講師の中津川浩章さんは自身も作品制作を行う美術家で長年障害のある人の作品展づくりや支援者や子ども向けのワークショップを行ってきた方で「見ること」をテーマに作品鑑賞について講演頂きました。また、東京のNPO法人AITでMADという現代アートの講座にも携わっているロジャー・マクドナルドさんには「読むこと」をテーマに、美術史をなぞりながら障害のある人の作品や表現が「アウトサイダー・アート」のような位置づけとして、どう芸術の歴史の中に登場し評価されてきたかを、お話頂きました。

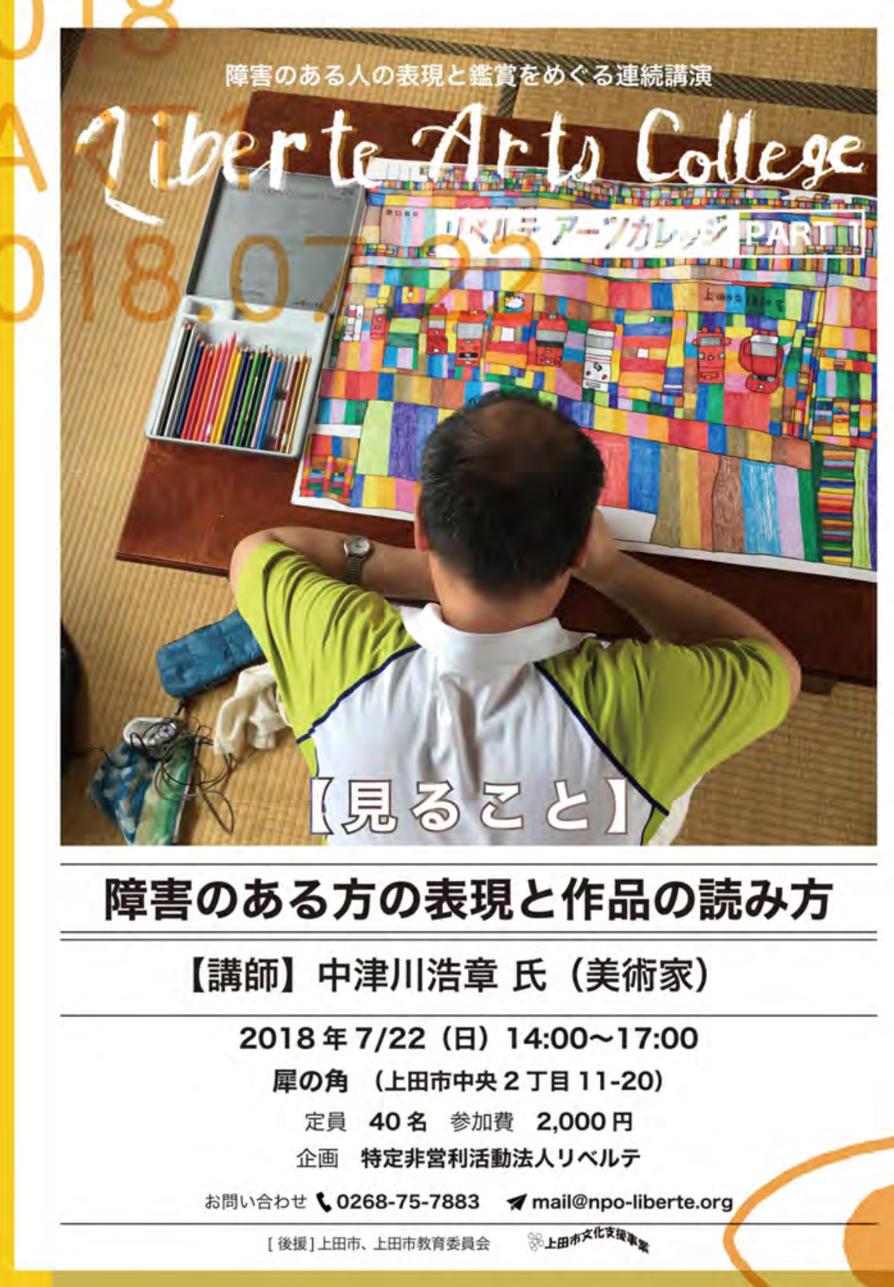
今回の講演を通じて、障害のある人がつくる作品だけでなく、例えば日本も含め世界各国の無名の人々がつくる工芸品や、表現なのか行為なのかわからない「新しい表現」と出会ったときに、どのように作品を観たり社会の中でどう位置づけるかを考えるきっかけになったのではないでしょうか。今回の報告書は、その内容を紹介しつつ、リベルテアーツカレッジを通じて街の中で行われているアートをはじめとする芸術文化に興味関心を持つ人が増えるような媒体となればと思っております。

特定非営利活動法人リベルテ

障害のある人の表現と鑑賞をめぐる連続講演
リベルテアーツカレッジ2018
報告書

| | |
|---|---|
| 発行日 | 2019年3月1日 |
| 発行元 | LIBERTE<br>特定非営利活動法人リベルテ<br>〒386-0012 長野県上田市中央4丁目7-23<br>TEL 0268-75-7883<br>MAIL mail@npo-liberte.org<br>URL http://npo-liberte.org |
| 企画・制作 | 武捨 和貴（特定非営利活動法人リベルテ） |
| 編集 | 村上 圭一（カラーボックスパブリッシング） |
| 報告書デザイン | 若林 広 |
| タイトル・文字イラスト・4コマ（見ること） | S.S.G |
| 4コマ（読むこと） | 嘉澄幸村 |
| 見ること背景作品 | yu.. |
| 印刷 | 株式会社プリントパック |
| 協力 | リベルテFC |
| 後援 | 上田市、上田市教育委員会、信濃毎日新聞社 |
| 助成 | 上田市文化支援事業 |

リベルテアーツカレッジ
2018
PART1
2018.07.22



障害のある人の表現と鑑賞をめぐる連続講演

Liberte Arts College

リベルテ アーツカレッジ PART 1

【見ること】

障害のある方の表現と作品の読み方

【講師】中津川浩章 氏（美術家）

2018年 7/22（日）14:00～17:00
犀の角 （上田市中央２丁目11-20）
定員 40名 参加費 2,000円
企画 特定非営利活動法人リベルテ
お問い合わせ ☎0268-75-7883 mail@npo-liberte.org
［後援］上田市、上田市教育委員会 上田市文化支援事業

障害のある人の
表現と鑑賞
をめぐる連続講演

## 「見ること」 中津川 浩章

2018年7月22日、よく晴れた日曜日の午後に上田市海野町商店街にあるイベントスペース犀の角で「障害のある人の表現と作品の読み方【見ること】」というテーマの講演会を行いました。講師の中津川さんには、ゴッホやルソーなどの作品の見方を例にあげていただきながら、障害のある人の表現を「見ること」の共通点についてお話しいただきました。また、作者と作品やその表現について、また障害と作品制作などの行為についての関係性や、見る側のスタンスなどもお話いただきました。その1部を掲載します。

2018年7月22日、よく晴れた日曜日の午後に上田市海野町商店街にあるイベントスペース犀の角で『障害のある人の表現と作品の読み方【見ること】』というテーマの講演会が行いました。講師の中津川さんには、ゴッホやルソーなどの作品の見方を例にあげていただきながら、障害のある人の表現を「見ること」についての共通点についてお話しいただきました。また、作者と作品やその表現について、また障害と作品制作などの行為についての関係性や、見る側のスタンスなどもお話いただきました。その1部を掲載します。

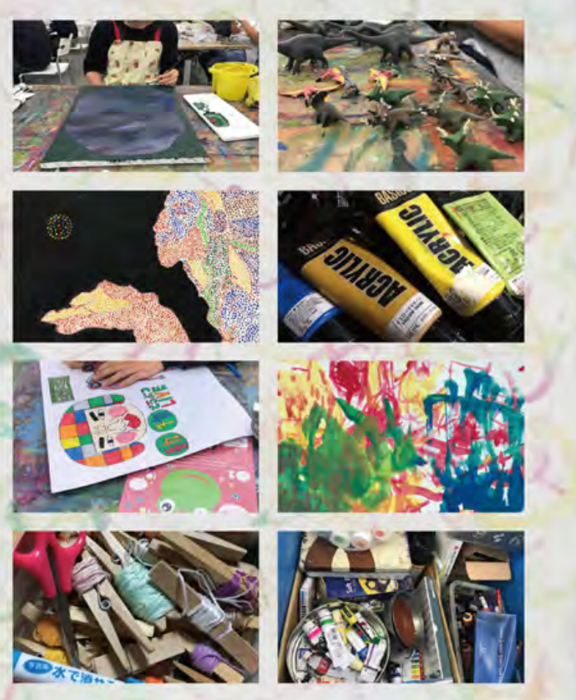
東京の千代田区のアーツ千代田3331(*1)に、障害のある人たちのアート活動を応援するNPO法人エイブル・アート・ジャパンという団体が入っているんですが、そこでエイブルアート(*2)芸術大学という、アート寺子屋みたいなものを7年くらいやっています。障害のある人もない人も月に1回、自分のしたい表現をして帰るという場所になっています。そこで参加者を見ていると、精神障害の人たちの中には、いつも人に見張られているような気がするとか、そうした自分の体験をそのまま可視化するような絵を描く人がいたり、また知的障害のある人の絵は明るくて力強くて、人を元気にする絵を描く人が多いような気がします。精神障害の人の絵というのは、本当に内側にグゥーっと入っていくタイプのものが多いですね。

また、自分自身の体験を描く人もいます。そこに自身の内面で起こっていることが描かれることもある。現実とは違うのだけど、本人の中ではそうなっている。本人に説明を聞かなかったら、ただきれいな絵だなぁって思ってしまうけれど、実はすごくいろいろな意味があります。みんながみんないかにも「統合失調症的」というような絵を描く人ばかりじゃないのです。優しく愛らしい絵を描く人もいる。統合失調症って暗くて、重くい絵を描く方ばっかりじゃないということも含めて多様性があるというところも知ってもらいたいところもあります。

また、描くことだけが目的で来ている人ばかりじゃないです。居場所としての意味もあります。月1回の教室でもいろんなことが起こります。もう本当に、そういう意味では絵画の指導よりも背景も含めたコミュニケーションがとても大切になってきます。本人だけでなく、ご家族や兄弟、支援者にとってもアートが刺激になり、コミュニケーションの手段になっているのだなと感じます。

制作するということも、僕たちから見るとそんなにたいした作業をやっているようには見えないこともあります。けれども、実はものすごいエネルギー使っていることが多い。その中で描かなくなる人もいれば、作品に時間をかけるようになる人もいます。

メンバーは制作する方法もいろいろなことを主体的に思いつきます。この時間でしかできないことをやろうと試みる人もいます。すでに出来上がっている技法や方法ではないから思ったほどうまくいかない。でもそれが完成に見えなくても、本人の中では何か達成しているのかもしれない。表現というのは人に見せるとかではなくて、自分の中の抑圧みたいなものを解放することだと思います。人間として生きるためのエネルギーを誰もが持っていて、どこかでそれを表現しないと前に進めないのです。



講演の終了後、来場者からの質疑応答の時間を設けました。

Q こういう障害のある方がアート作品を作るときに、見守る立場の人や支援する人は、どういうスタンスで接すればいいでしょうか。制作の補助ではないですが、こちらが誘導して描かせている気もするのです。

A 例えば自分もそうなんですけど。紙と鉛筆を渡されて、さあ描けと言われても描けないじゃないですか。すぐに描ける人はそんなにいないと思うのですよ、無理矢理させても本人は疲れるだけですよね。だから相手の様子をみて「あ、今だったら描けそうだな」とか、声がけしていく。あと画材も例えば自閉の方は匂いとか触覚にすごく敏感なので、彼らの好きな匂いのものから手渡すとかそういうのがあるんですよ。

筆圧の弱い人は、クレヨンよりキットパス(※3)がいいとか。そういう特性にあったものをある程度こちらで考えて進めないと、紙とクレヨン渡しても描けないですよね。キットパスにしたら描けることもあるし、紙がガサガサしている方が良い人もいる。また、カレンダーの裏に描く人とか広告の紙とか、ツルツルしている方が好きな人もいます。そういうとても繊細なアプローチで決まってくるんですよね。なので、もしかしたらそれば絵じゃない場合は、例えばビニールテープやシールで遊ぶとか、そういうのもOKなんです。紙を切り刻むとか、僕らが表現だとは考えていないものも含めて、彼らは何をしたいのかを、何を言おうとしているのかというのをコミュニケーションツールとして考え、試行錯誤しながら場を共有していく。そういう感じなのです。その中に紙と絵具があったり、たまたま紙とクレヨンがあって、それが合致する人がいて、描いていくことで美術として評価されるっていう流れができているだけなんです。だから、もしかしたら別な何でもないものを作れる人がいてもいいしとも思うのですよね。

Q 障害という括りがどういった括りなのか気になります。その人が生きづらいと思うのであれば人間であることも障害だし。また、どんな人でも表現をすれば、パーソナリティや歴史が反映さるんじゃないかと思うと、著しい障害を持った人に対してフォーカスが当たりすぎているんじゃないか、という気がします。

A 柱がふたつあると思います。まず、ほとんどの人間が障害者のようなものだと私は思います。それは目に見えないものでも心に傷があったり、環境的なものや人間関係でみんなそれぞれ自分の内側に欠損がある。そういう意味で「障害者アート」ってすごく難しい言葉です。今おっしゃったように矛盾があるのです。基本的にはアートというものは、今言った意味での障害や欠損がある人たちのものだと僕は考えています。表現するモチベーション自体に障害、欠損、内的な圧力というものがある。つまり、障害特性の反映ではなくて、その人の人間性が障害や精神的な欠損があることによって、図らずも思想的な深度を持つことになったり、重い悲しみを抱えることになったり、また抑圧や暴力的な何かを内在している作品が魅力的に見えるのです。これは障害特性ではなくパーソナリティ、人間の問題なのです。

それからもうひとつ、障害者アートだけを特化するかというのは本当に問題です。だけど、重い障害のある人たちにはやはり合理的配慮というものがないと、社会の中で形を持つことにならない。ある程度サポートすることで彼らの持っている特性なりをきちんと社会に紹介する必要があります。彼らの中にコミュニケーションしたいという想いがマグマのように詰まっているとしたら、それを社会化することによってコミュニケーションのやり方が変わる可能性もあるのです。それは、障害がある人達だけの力ではできないと思うので、間に入る人がその制度や考え方を作り、将来的には「障害者アート」という言葉がなくなれば一番いいなと思うんです。基本的に障害者アートを現代アートと分断してカテゴライズすることには反対です。

質問を受けて本当に良かったです。最後、結論を話すことを忘れていて、実を言うと、障害の反映ではないすべてのパーソナルなものについて。障害、自閉スペクトラム症とかダウン症とか、今日はさまざまな障害特性の話をしようと思っていて、そう、盲の人や聾の人の話もしようと思ってたんですけど。障害特性を通して作品を読み込むのも大切だけど、それは表現にとって本質的なものではない。背景に一人ひとりの人間がいて、そこにこそ表現の基盤があるということです。普通の一般の人と境界線があるわけではなく、グラデーションでつながっているっていうことを一番伝えたかったんです。

けれども、そうは言っても確実に障害特性の反映はあるので、そこも無視できないよっていうことを大切にしてもらいたいなあと。それは、自分の知識だけではなくて関わるさまざまな業種人たちの知識や経験があって、みんなで一緒に考えると障害者の表現の秘密が見えてくるんじゃないかなということ。表現行為を続けることで二次障害(※4)が軽減される。そのことによって表現することをやめてしまっても、より豊かで幸せな生を生きられるんじゃないかとか。そういうことを考えるようになったということが、アートの可能性だと思います。

**武捨：** なかなか福祉の現場からの視点だと言葉にできないことを、両方の現場をみてるからこその様子を教えていただけたなと感じました。ありがとうございました。

講師プロフィール

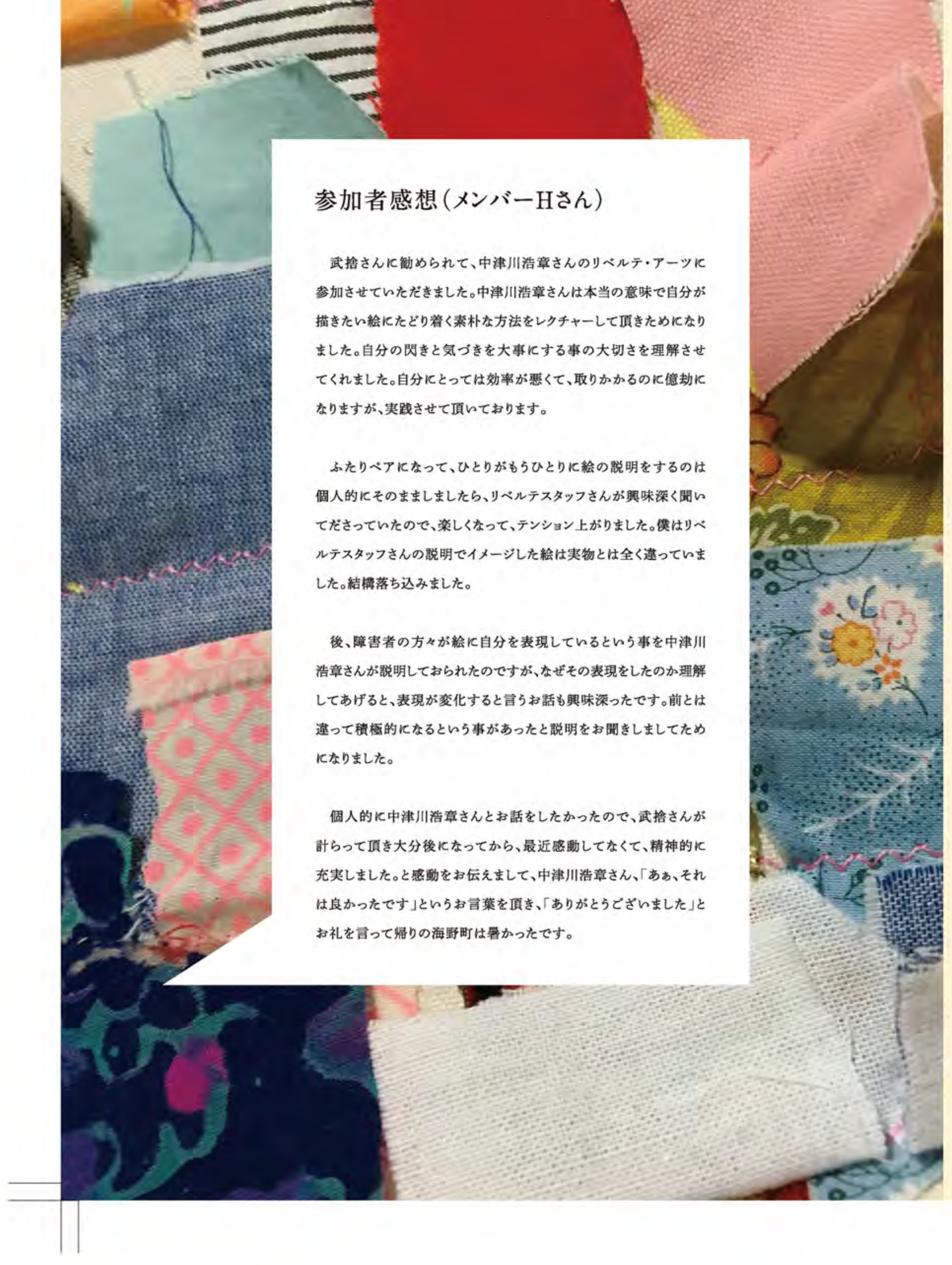
**中津川 浩章 氏**

（美術家）

画家、美術家。「記憶・痕跡・欠損」をテーマに作品を制作。国内外で個展、ライブペインティング多数。埼玉県障害者アート展、ビッグ・アイアートプロジェクトなどでアートディレクターを務め、川崎市岡本太郎美術館「岡本太郎とアールブリュット」展キュレーション、デワメキアート展選考委員ほか多くの公募展作品選考にたずさわる。バリアフリーのアートスタジオ「エイブルアート芸大」、あらゆる人を対象にしたアートWS、美術史WS、講演などを通じ、アート、福祉、教育、精神医療などさまざまな分野を越境し社会とアートの関係性を問う活動を行う。NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事、NPO法人アール・ド・ヴィーヴル理事、一般社団法人Get in touch理事。Art InterMix代表。

---

*1:東京都千代田区にある文化芸術施設。2005年に統合により閉校した千代田区立練成中学校の校舎を改修し、かつて教室として使用されていた部屋をギャラリーや多目的スペースとして活用している。
*2:アートを通して、だれもが豊かに生きることのできる社会の実現を目指し、「エイブル・アート・ムーブメント（可能性の芸術運動）」を提唱して、アートの可能性や人間の可能性を再発見する活動やその理念のこと。
*3:日本理化学工業の固形マーカー。ガラスなどにも描くことができ、パラフィンが主成分で小さな子どもにも安全で環境にもやさしい画材。福祉施設やイベントなどで多く使われている。
*4:自閉症スペクトラムの場合、こだわりや人付き合いが苦手なことで起こる生活上の問題が一次的、障害によって本人が周りから受けるストレスや挫折感などを二次的と言う。



## 参加者感想（メンバーHさん）

武捨さんに勧められて、中津川浩章さんのリベルテ・アーツに参加させていただきました。中津川浩章さんは本当の意味で自分が描きたい絵にたどり着く素朴な方法をレクチャーして頂きためになりました。自分の閃きと気づきを大事にする事の大切さを理解させてくれました。自分にとっては効率が悪くて、取りかかるのに億劫になりますが、実践させて頂いております。

ふたりペアになって、ひとりがもうひとりに絵の説明をするのは個人的にそのまましましたら、リベルテスタッフさんが興味深く聞いてださっていたので、楽しくなって、テンション上がりました。僕はリベルテスタッフさんの説明でイメージした絵は実物とは全く違っていました。結構落ち込みました。

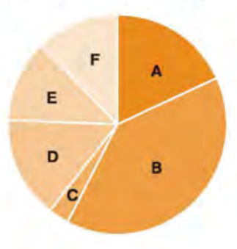
後、障害者の方々が絵に自分を表現しているという事を中津川浩章さんが説明しておられたのですが、なぜその表現をしたのか理解してあげると、表現が変化すると言うお話も興味深ったです。前とは違って積極的になるという事があったと説明をお聞きしましてためになりました。

個人的に中津川浩章さんとお話をしたかったので、武捨さんが計らって頂き大分後になってから、最近感動してなくて、精神的に充実しました。と感動をお伝えしまして、中津川浩章さん、「あぁ、それは良かったです」というお言葉を頂き、「ありがとうございました」とお礼を言って帰りの海野町は暑かったです。

リベルテアーツカレッジ 2018 PART1 障害のある人の表現と作品の読み方【見ること】

## 障害のある人の表現と鑑賞をめぐる連続講演に関するアンケート

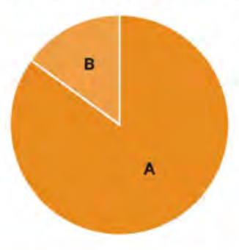
Q1. 今回、リベルテ アーツカレッジが開催されることを何から見聞きして知りましたか。（複数回答可）



| | | |
|---|---|---|
| A | チラシ | 6 |
| B | リベルテのSNS（ツイッター、フェイスブックなど） | 13 |
| C | 知人やフォローしている団体のSNSやウェブサイト | 1 |
| D | 友人や知人など | 5 |
| E | リベルテスタッフから | 4 |
| F | その他 | 4 |

（メンバー／映劇の新聞／ビックハット／犀の角フェイスブック）

Q2. 今回の講演内容について、あてはまるものを丸で囲んでください

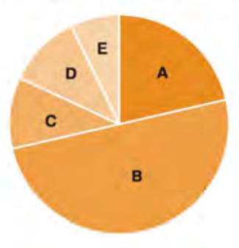


| | | |
|---|---|---|
| A | とても満足 | 23 |
| B | 満足 | 4 |
| C | ふつう | 0 |
| D | 少し不満 | 0 |
| E | 不満 | 0 |

Q3. 講演内容に関して、感想やご意見をご自由にお書きください

紙粘土を握ったり、広告をクシュクシュにしたり破いた文庫本など、それがアートになることに興味津々です!日頃感じていたことなのでもっと知りたいです!／3時間あっという間で楽しかったです。／中津川さんのお話がとてもよかった（コミュニケーションの…というところ）／すごくわかりやすかった。「問うこと」が大事ということ／美大出身者です。障害者作品の優遇悶々が消えました。まっすぐ前を向いて作品をつくっていきたいと思いました。／絵をこんなに時間をかけて見たことがありませんでした。／最後の質問での）お話がとてもわかりやすかった／ボーダーが同じではないという点、ボーダレスで考える見ることが理解のある見方であると思っていました。／絵を見て言葉表すことが目からウロコ!／リラックスした中で周りの皆様と絵の感想をシェアできて思わぬ発見がありました。／絵の見方について言語化して共有し他者の言葉を入れていくというお話がとても勉強になりました。／自閉症や統合失調症で表現に特徴が出るのが興味深かったです。／前半「作品を見る」を実際にやってみるのが楽しかった。／中津川さんがイキイキしていてよかった／精神面が充実していました。感動かわからないんですけど、とてつもなくよかったです。／表現とは障害の反映が全てではない／表現を肯定的に受け止めること大切だなと思った。

Q4. 今回の表現やアートを「見ること」についての講演の内容でもっと深掘りして聴いてみたい内容などありますか?

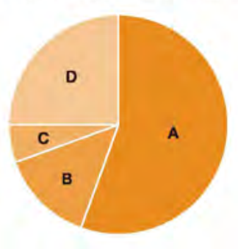


| | | |
|---|---|---|
| A | 深掘りして聴いてみたいことがある | 6 |
| B | もし続きがあるなら聴いてみたい | 14 |
| C | わからない | 3 |
| D | この内容は充分だ | 3 |
| E | 興味がない話題だった | 0 |
| F | 無回答 | 2 |

Q5. もし深掘りして聴いてみたい内容があれば教えて下さい

表現すること…した後その後について少しお話があったそのあたりについて話／障害のある方の表現と背景の事例をもっとたくさん見たいです／プライバシーの保護…差し障りのない範囲で制作の様子が見たいです／性的欲求の昇華／アートとお金について／その人らしさの引き出し方／「コミュニケーションツールとしてのアート」や「障害者アートはコミュニケーション革命」というタイトルの講演が聞きたいです

Q6. リベルテアーツカレッジの進行についてお聞きします。今回の企画の進行はいかがでしたか?

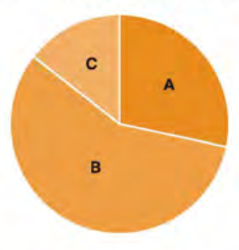


| | | |
|---|---|---|
| A | とても良かった | 20 |
| B | よかった | 5 |
| C | わからない | 2 |
| D | 良くなかった | 9 |
| E | 全くよくなかった | 0 |

Q7. 上記を選んだ理由や今回のリベルテ・アーツ・カレッジについての感想などあればお書きください。

とても良かったが、長すぎると参加できるひとが少し減る／自由で良かったです♡／障害者アートについて疑問だったところをわかりやすく教えてもらった／一般的な尺度のものさしが見方が変わりました／良い時間をありがとう!!／とても勉強になりました。面白かったです。／進行役の方がスムーズに進めてくださり発言しやすかったです。／「障害者」アート、この名前をいつか超えられる日が来るのが楽しみです／精神が充実してきた。感動かわからないんですけどとても良かったです。／具体的に活動されている方の話は面白い／絵を見て自分の思いや人の思いを聞くことはとても楽しいことだと感じました!言葉にすると深めていくこと背景を知ることの大切さを知れてよかったです。より楽しみが増えました♪／より疑問が深まりました

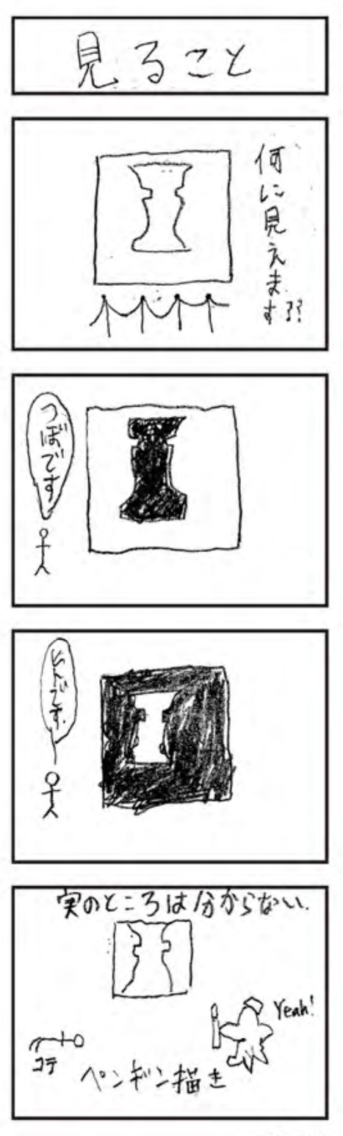
Q8. リベルテアーツカレッジPART2の講演も予定しております。参加したいと思いますか。



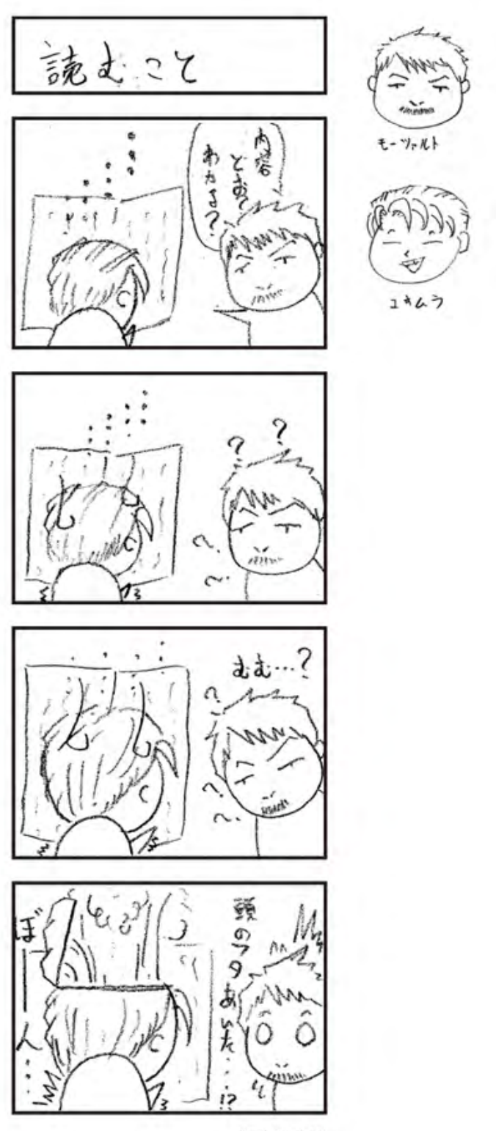
| | | |
|---|---|---|
| A | ぜひ参加したい | 8 |
| B | 企画による | 16 |
| C | わからない | 4 |
| D | 参加したくない | 0 |

Q9. リベルテ・アーツ・カレッジで取り上げてほしい話題やイベントがあればお書きください。

「こんなこともアートだ!」「アートじゃなくても、本ものも表現だ!」みたいなことをもっと知りたいです☆／子供をあずけてでてくるので、平日、土曜日の昼間がありがたい



作S.S.G



作嘉澄幸村

リベルテアーツカレッジ
2018
PART2
2018.09.22

Liberte Arts College
リベルテ アーツカレッジ PART 2

【読むこと】
障害のある人の表現と鑑賞をめぐる連続講演

障害のある方の表現と作品の読み方

【講師】ロジャー・マクドナルド 氏
（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT / エイト］副ディレクター）

2018年9月22日（土）18:00〜21:00
犀の角 （上田市中央2丁目11-20）
定員 40名 参加費 2,000円
企画 特定非営利活動法人リベルテ
お問い合わせ ☎0268-75-7883 mail@npo-liberte.org
［後援］上田市、上田市教育委員会、信濃毎日新聞社 上田市文化支援事業

# 障害のある人の表現と鑑賞をめぐる連続講演

## 「読むこと」 ロジャー・マクドナルド

始める前にたぶん、なぜこの人は日本語をしゃべっているんだろうと思っている方がいつもいるので、そこをまずクリアにしますね。わたしは東京生まれです。母が日本人、父がイギリスの人で、国籍は日本です。9年前に移り住んできて、東京は仕事で行ったり来たりしています。こういう障害者のアート表現に携わるひとつの理由は、わたしが博士課程の時の先生がロジャー・カーディナルという人だったんですね。いわゆるアウトサイダーアート(*1)という本を1972年に書いた先生なんです。そういう先生のもとだったので、目に見えないようなものが美術という形になる、そのプロセスについて研究しているんです。

今日のメニューなんですけどアートはどう読まれてきたのかということを歴史的に確認しましょう。20世紀のアートそのものは、どうやって読まれてきたのかということです。メインストリーム、王道的な美術史や、美術がどう批評されてきたのか、それによってどう価値がついて来たのかというのをおさらいするとこから入ります。

そして、アウトサイダーアートとここでは呼んでますけど。この言葉、あるいは用語の確認です。そして「アウトサイダーアートとは」までは行かなくてもいいんですけど、みなさんのアートで議論になるように歴史的な定義とか確認をした方がいいかなと思っています。

そしてふたつの別の美術の読み方、あるいはその価値をつける事例を出すのはどうかなと思いまして。ひとつ目にはその19世紀と20世紀の間におきたアーツアンドクラフツ運動(*2)です。ふたつ目は、精神医療寄りかもしれませんけど、アートヒーリングと呼びましょう。そして、最後に「ミュージアム・オブ・トゥギャザー展」の具体的な事例です。

## メインストリーム

### 一方方向的な歴史の描き方

20世紀に入るとアートが非常に複雑なものになっていくんです。社会も聖域も経済も複雑になると同時に芸術のさまざまな表現が拡張し複雑になるとその中で美術の歴史、美術史というものもすごく革命的な時代を迎えると思うんです。

1930年代にニューヨークのMoMA（ニューヨーク近代美術館）をつくったアルフレッド・バー館長(*3)という方なんですけど。その方が描いた非常に有名な図なんですね。彼が「近代アートはこういう流れでこう過去からやってきてこうなるであろう」という図を描いて、それをある展覧会のカタログに掲載するんです。こういうものがあったからこそ、ここから次の運動が出てきた。一方方向的な歴史の描き方、王道美術史はこういう方法論の上でされてきたと思います。

美術の学校では、だいたいこれに近いものを学びます。何とかイズムがあって、そのあと何とかイズムがあってというスタイル。美術史そのものはそういう意味ではすごく重要なアートを読む装置として20世紀の中で成長してきたと思います。美術館がこういうようなアートの読み方を1番守ってきた現場だと思います。

例えば近代アート展とか、印象派があってその後ポスト印象派があって、ゴーギャンみたいな人がいて。ラインがはっきり示されているという感じです。アートのいろんな見方は当然あって、ひとつはこういう構造的に歴史にしていこうという運動ですね。その中には、例えば形式主義。簡単に言うと、作品重視に作品を読もうとする。作品のまわりにあった状況とかつくった人の気分とか政治状況だとか、なるべく見ないで作品だけみれればいいじゃんという見方が特に1930年代とか40年代にひとつの主流になったりするんです。

### ジョン・バージャーが示す3つの見方

1970年代から80年代に入りますと、さまざまな別のチャレンジ、別のアートの読み方もあるんではないかという動きが出てきます。『Ways of Seeing』ジョン・バージャーというイギリスの批評家の本ですね。バージャーさんはここで、アートの価値とかアートを読むということには実はもっとさまざまな、多様なポジションがあるではないかと。例えば、あなたのジェンダーによってアートの読み方って全然変わるんじゃないんですかということを言ったりする。

何故、西洋の古い美術館のコレクションのほとんどはヌードの女性の絵画で占められているんであろう、ということを問いだすんですよね。男性中心的な目線、読み方、価値が実は美術の中にあるんではないかという問いを出しているんです。この70年代から美術史というアートを読む学問も大きく拡張していきます。女性の目線からアートを見始める、西洋じゃない場所に住んでいる人たちからのアートの見方とか。それでジョン・バージャーはさまざまな具体的な事例をいっぱい出しながら、もっと多様な読み方を提示します。

3つだけ。例えばジャクソン・ポロック(*4)ですね。有名なアメリカの戦後の画家ですけど、もともとジャクソン・ポロックのアートの読みというのは天才論に近いような読みでした。この人はすごいクリエイティビティが溢れていて、とにかく何をやっても天才的に作品が生まれて。「どうして」「なぜ」というのを言葉にせず何かすごいことをやっているみたいな。あるいは社会史、というめがねもひとつあると思うんですよね。これも60年代とか70年代に大きく出てきた読み方です。社会史の読み方の裏にはカール・マルクスという思想家の考え方が大きく寄りかかっています。簡単に言うとアートという歴史的な人間の行為、美術館という場所を見ていくと、社会的に見ても特権的な人の活動ではないかと。階級というめがねからアートを見始めると、少し変わってくるんじゃないかという読みですね。

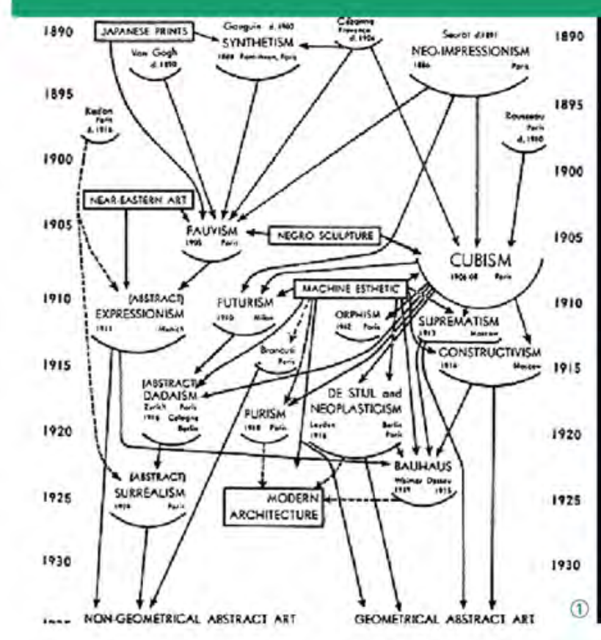
イギリスを代表するジョン・コンスタブル(*5)という牧歌的風景を描いてた画家がいるんですけど。社会派的なめがねで見ると、この絵が描かれた時代ってちょうど、イギリスの産業革命の時代と同じなんです。1830年代から40年代、その産業革命の真っ只中に、何故きれいな牧歌的な絵が描けたんだろうみたいなことをクエスチョンできるわけです。ある意味では特権的なポジションだから描けていたんではないかと。煙突とか社会を汚染していた工場とか一切描いてない。何故かというと、パトロンがこの絵を買うんです。そのパトロンの持っている雄大な土地をコンスタブルは描いているんですね。なので、この絵の裏には経済、非常に特権的な階級の目線があるんじゃないかという読みもできるんではないかということです。

もうひとつは、ポスト構造主義ともいうんですけど難しいのでポスト1968年と言いましょう。これは今の美術には非常に影響力が強い見方です。ミッシェル・フーコー(*6)というフランスの思想家はある議論をフランス中心に展開するんです。簡単に言うと、社会あるいは人間と人間の関係性の間には、権力の関係もあるんではないかと、パワーリレーション。実はこの部屋でもパワーリレーションが明らかに起きてますね。わたしと武捨君が話しているその舞台が、ちょっと上がってますね。フーコーは、ほぼ初めてそういう構造的な問題を出し始めるんです。美術館、あるいはギャラリーというアートが紹介される場所とそこに訪ねる鑑賞者、そこで見せるアーティストの間にどういう権力の関係があるんだろうとか。

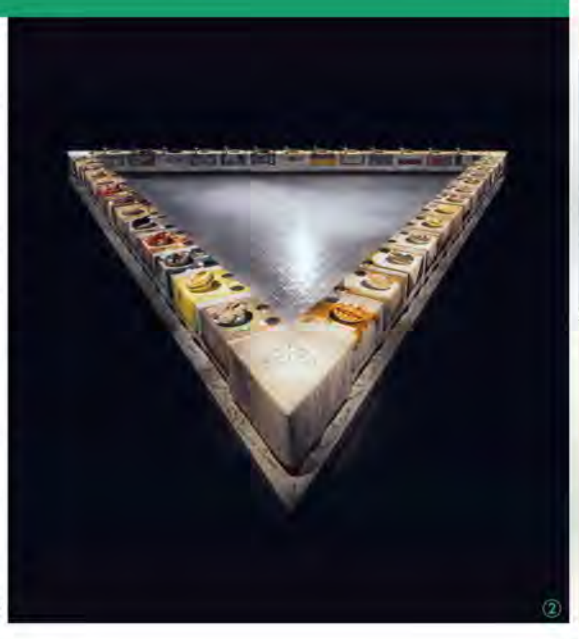
### フェミニズム、西洋至上主義

男性の読み、男性のフィルターに対して、今話したような別の読み方を導入すると、別の知恵とか歴史が書けるんじゃないか。フェミニズムはその中でも、わかりやすい事例のひとつです。例えば、1971年にカリフォルニアで初めてフェミニズムアートコースというのが、ある大学でオープンします。また、ジュディ・シカゴ(*7)の「ディナーパーティ」という作品はフェミニストアートの名作ともいわれてます。編み物とかセラミックでできたお皿がいっぱい乗っていて、さまざまな歴史上の女性たちの名前が、テキスタイルの上に編み込まれているんです。

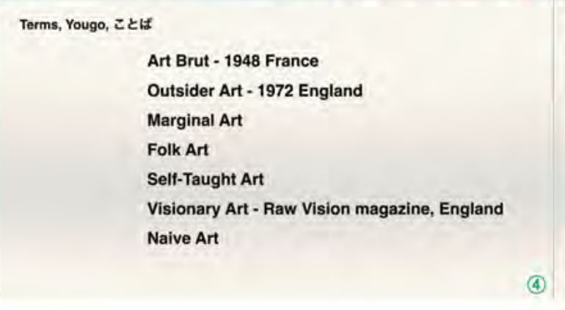
美術史というのは、ヨーロッパそして北アメリカ中心的な歴史でもあったんではないかという疑問がありますね。70〜80年代を経て非西洋圏の文化がどうやってアートの中で、表彰されればいいのか。この問題もすごく重要だと思いますね。84年にMoMAで開催された「"Primitivism" in 20th Century Art」伝説的な展覧会なんですけど、西洋の美術家たちがいかに、非西洋圏の美術にインスパイアされたかということを展示するんです。そういう動きの中で、89年にパリで大地の魔術師展(*8)というものが起きました。これは50人のヨーロッパ、アメリカの作家、50人の非西洋圏の作家、まさにフィフティフィフティのバランスでキュレーションされたんです。現代美術だけではなくて、さまざまな部族とか、伝統芸術の方たち、職人のような作品とコンテンポラリーアートを一緒に見せていくような試みでした。



①

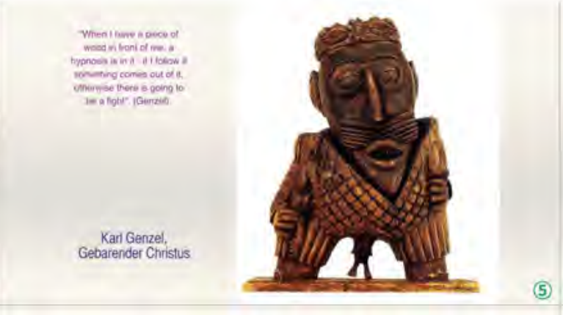

②

Jean-Hubert Martin, Magiciennes de la Terre, 1989, Musée National d'art Moderne, Centre Pompidou, Paris.
③

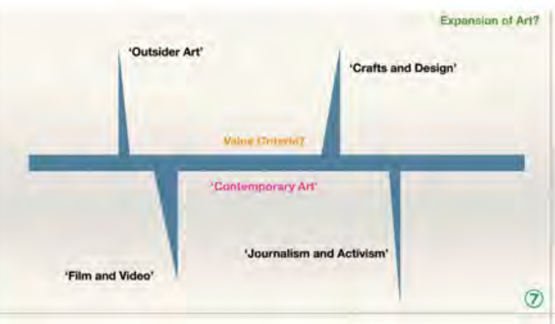

Terms, Yougo, ことば

Art Brut - 1948 France
Outsider Art - 1972 England
Marginal Art
Folk Art
Self-Taught Art
Visionary Art - Raw Vision magazine, England
Naive Art

④

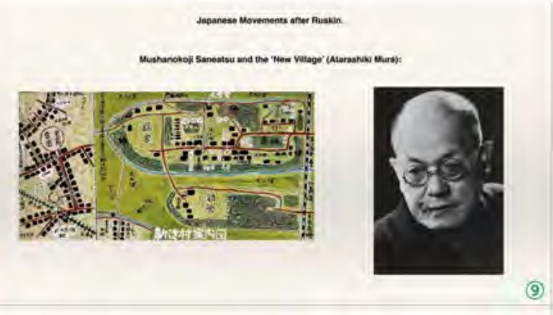

"When I have a piece of wood in front of me, a hypnosis is in it. If I follow it something comes out of it. Otherwise there is going to be a fight." (Genzel)
Karl Genzel, Gebarender Christus
⑤

The Museum of Everything
James Brett, London
BARBER SHOP
THE GALLERY OF EVERYTHING
⑥



⑦

'Art of the people'.
Guild of St. George in 1871
⑧


Japanese Movements after Ruskin.
Mushanokoji Saneatsu and the 'New Village' (Atarashiki Mura):
⑨

Emma Kunz Hilma af Klimt
⑩

⑪

⑫

藤岡祐機
Fujioka Yuki
Expanded Captions:
⑬

① アルフレッド・バーが作った「キュービズムと抽象美術」(1936年)展覧会のカタログに掲載されたアートヒストリーのチャート。 ② ジュディ・シカゴ「ディナーパーティ」1979 ③「20世紀美術におけるプリミティヴィズム」展図録(MoMA, 1984) ④ アウトサイダー・アートなどの言葉。 ⑤ ハンス・プリンツホルン「精神病者の芸術性」のカール・ゲンツェルのページ。 ⑥ The Museum of Everything, ロンドン ⑦ 拡張するアート ⑧ ジョン・ラスキンの本 ⑨「新しい村」の案内図と島崎藤村。 ⑩ エンマ・クンツのカルテ。 ⑪⑫「ミュージアム・オブ・トゥギャザー」展、スパイラルガーデン、2017 ⑬「ミュージアム・オブ・トゥギャザー」展のキャプション。

## アウトサイダーアートの定義

### アウトサイダーとアール・ブリュット

アウトサイダーアートの用語の確認をしましょう。アール・ブリュット、アウトサイダーアートこのふたつがいまだに1番使われる言葉ですね。違う言葉を考えようという試みはあるんですけど、なかなか他の定着する言葉が出てきてない気はします。

アール・ブリュットは医療的に精神病患者みたいなところにすごく特化してる単語だと思います。それに対して、アウトサイダーアートは狭い医療的な定義を、もうちょっと広く見てみましょうということで1972年、ロジャー・カーディナル(*9)が出すんですね。アート業界とかアートシーンとあんまり関係がない、あるいはまったくないということがアウトサイダーアートの特徴と言われています。

重要なのは、こういう単語というのは批評家とか歴史家がつけた言葉なんですね。自分たちで自分のことをラベリングするのに対して、アーティストから出てきた言葉ではなくて、外の研究者や批評家がつけた言葉っていうのは重要な違いだと思いますね。そして、何らかのメソッドとか、そのアートのスタイルを指しているわけではなくて、そのアートをつくる人たちを指しているんですよね。

1972年以降のアウトサイダーアートを見ますと、非常にそれまで狭かった医療的な定義がもうちょっと拡張していく傾向があるのかなと思います。オカルトの領域とか、スピリチュアリズム(*10)とか、犯罪者とか変性意識状態(*11)とか、フォークアート(*12)とか、宗教的なビジョンを見る人たちとか。あるいは、単純に王道のアート業界、アートの世界の中から無視されているアーティスト。クリスチャン・ラッセン(*13)さんはそういう意味ではアウトサイダーアーティストになりますね。経済的にはインサイダーアーティストなんだけど、美術史的には完全にアウトサイダーアーティストです。将来的にラッセンみたいなアーティストも、広いアウトサイダーアートの定義の中には入るかもしれません。

ハンス・プリンツホルン(*14)先生ですね。最初に真剣に精神病患者たちの芸術表現を、アートとして評価し始めた方で、本を書くんです。1922年この本がいかに当時のアーティストたちに読まれたかっていうことは、すごく重要なんです。例えば、カール・ゲンツェルという、この本の代表作家のひとりですけど。精神病院でずっと木彫をコツコツと描いていて。木が手に入らないときは、毎日朝ごはんで出てくるパンをかじって。かじったパンを粘土のように置いて、それで固くなったパンを彫刻するという。とにかく止まらないようなクリエイティビティな人がいたりするんです。

アール・ブリュットは、ジャン・デュビュッフェというフランスのアーティストでもあり、収集家が、プリンツホルンの本を読んだりいろんな精神病院に行ったときに「こんな表現があるんだ、これはもういわゆるアートワールド、アート世界とはまったく別のクリエイティビティの歴史がここにあるんだ」ということでびっくりします。デュビュッフェは、アール・ブリュット「生のアート」という言葉を考えて、収集を始めるんです。デュビュッフェの収集された多くの作品は今ローザンヌの美術館にあります。

### 幅広い美術のフィールドと関係づける展覧会の例

2000年代に入ってから、アウトサイダーアートの表現が現代美術の世界の中で再度評価されています。1番大きい出来事は、2年に1回イタリアのヴェネツィアで行われるヴェネツィア・ビエンナーレ(*15)というのがあるんですけど。この2013年のビエンナーレの総合展覧会は、140人くらいの作家の半分くらいは独学、またはアウトサイダーアート。もしくは、コツコツとサラリーマンしながら何かつくっていた。そういう人たちと、現代美術のアーティスト140名くらいのを展示をしたんです。

他にも2013年に、フィラデルフィア美術館が急にアメリカの美術館として、すごくアウトサイダーアートの権威的美術館になっちゃうんです。アメリカに長年アウトサイダーアートを収集していた夫妻がいるんです。その夫妻が亡くなって、何千点にものぼるアウトサイダーアートのコレクションをフィラデルフィア美術館に寄贈するんです。それまで全く収集とか無視してきたようなものが、いきなり何千点も入ってくると。当然、そのコレクションを考え直さなければならない。専門の学芸員を入れて、何回かすごくいい展覧会をやってるんです。

イギリス・ロンドンではミュージアム・オブ・エブリシング(*16)、すべてのものの美術館というのが2010年くらいからあって。ジェームズ・ブレッドさんという、個人コレクターですね。アウトサイダーアートを長年収集してた方が、もっと大勢の人に見せたいということで、移動式美術館と言われる試みもあったりするんです。

なので現代美術と呼ばれているひとつの大きい王道があったりすると、最初に話した価値の判断、どういう読みをアートにするかによって、それがどんどん拡張してきたという現象がこの40〜50年にあったのかなという感じがします。その拡張の一部がアウトサイダーアートになったり、あるいはデザインとか工芸とか建築とか、あるいはジャーナリズムとか。報道みたいな運動も実は一部アート的に取り入れられたりしてます。

## オルタナティブなアートの読み方

### アーツ・アンド・クラフツから上田・自由画教育運動

ふたつの違う美術の読み方、オルタナティブなフィルターと言ってもいいかもしれません。ひとつ目はアーツ・アンド・クラフツ(*17)ですね。工芸やデザインと言ってもいいのかな、そういう領域と美術の領域の関係を見直すこと。

19世紀の終わりイギリスで起きたアーツ・アンド・クラフツ運動というものがあったんです。ジョン・ラスキン(*18)とウィリアム・モリス(*19)、このふたりが主に中心的な役割を果たしました。大正時代の日本にラスキンとモリスの思想、考え方が大きく流れてくる。これはすごい面白くて大事なことのような気がします。ラスキン、モリスは芸術、美というものはもっと人々の生活の一部に織り込んでいくように、日常の中にあるべきものであると。特別な美術館とか特権階級だけではなくて、みんなの生き方そのものに美とか芸術というのがあってもいいというスタンスですね。

この時代のアーツアンドクラフツを考えてみると、もしかしていろんな別のアートの見方、アートの価値みたいなものが眠っているんじゃないかと思うんです。日本にもこういう考え方が入ってくるんです。1925年とか28年にラスキンとか、モリスの本が訳されてるんですよね。島崎藤村(*20)も、小諸でラスキンのことを実践しています。この人たちは、基本的に社会主義者です。もっとヒューマニスティックに、産業革命が周りにあった中でもっと人間を人間らしく、道徳性をもって生きていくべきだという感じで。それが日本にすごく影響をもって流れてくるんです。

いわゆる国民、人々の芸術であるべきだという考え方が、ラスキン、モリスには非常にあって実際にそれを実践するためにさまざまなプロジェクトを展開します。例えば、ギルド制度をつくるんです。今で言うとアートセンターとか、総合芸術センターみたいなものを考えて、実際につくるんです。日本にどういう形でラスキンの考え方が反映されてきたかというと「新しい村」という伝説的なコミューンというか、自立した共同村みたいなところができます。ここでラスキンやモリスの思想のもと、すごいヒューマニズムベースの社会生活、自立生活、教育、農業、そして芸術を含んだような生き方をするんです。あとはもちろん上田なので入れましたけど、山本鼎(*21)さんがリードした自由画教育運動(*22)もやっぱり前衛的だと思います。彼も芸大を出ていて確かヨーロッパに行くんですね、パリとかロシアを通過して、そこで見たさまざまな社会主義の共同生活芸術村みたいなものを見て日本でもできないかということで、まさに上田の近くの神川小学校で実践しました。

### アートヒーリング

アートヒーリングって呼んでますけど、このクエスチョンから入りますね。アートとは何ですかという質問ではなくて、今目の前にある作品は、わたしにとってどういう影響を及ぼしているのか。私を悲しくしているのか、怒らせているのか、穏やかにさせているのか。あるいは、社会に対してすごい論争を巻き起こしているのか。ちょっと質問を変えるだけで、全然違う読み方ができるのかなと思います。

歴史的にアートと医療、アートとヒーリングのことをちょっとおさらいします。19世紀に病院治療からもっと社会の中で家族の中で治療をしましょう、あるいは精神病患者とか障害者の治療をしましょうというのが、イギリスで起きたと言われています。その一部に、芸術をつくるとか詩を書いてみるとか、音楽をみんなでやろうとか。そういう芸術表現も、セラピーの一部として、導入されたそうです。

なので歴史としては150年くらい前から、そういうクリエイティビティを使って精神的な不安定さを穏やかにするとかしている。特にその中でもキリスト教の宗派のクエーカー教というのがあるんです。クエーカーたちは早い時点から精神病患者とかさまざまな障害を持った人たちと、みんな一緒に社会の中で住んでいこうという方針を持っていたそうです。精神病院に入れてカギをするみたいなとこから、徐々にシフトしてきた歴史だと思います。

と言っても60年代の段階でもまだカギを閉めるモデルが主流でした。日本もイギリスもアメリカも。薬治療、あるいはもっとひどいのは電気ショック治療。60年代に何人か精神科医の先生たちがそのモデルを疑問視していて、もっと違うセラピーがあるんではないかというところに至ります。それで、アートはもしかして生きるため、あるいは精神的な「well-being」を保つためのようなものじゃないかと考えられました。

わたしはいつもこのマティス(*23)のこの言葉、1908年に残してますけど「精神的に安定する居心地のよい椅子のような作品をわたしは描きたいんだ」と。作品が具体的な役割を果たさなくても、絵というものも十分社会的な役割「function」になると思います。

例えば、エンマ・クンツ(*24)の絵ですね。エンマ・クンツはもともとアーティストではなくて、1920〜30年代スイスに住んでいたヒーラーですね。自分のことをアーティストとも呼んでないし、こういうものを作品として思ってないんです。いろんな病を持った方達が彼女の元に来て、彼女の非常な独特な技法の元で、その病を一緒に解決していくカルテです。個人の患者さんのカルテを描いて、グラフペーパーの上で振り子を持ってその患者さんと話すと振り子が動くそうなんです。その動きをマッピングしていって、非常に複雑なマンダリックなフォルムをつくっていく。この地図のようなものは、その人の精神あるいは身体の状態を表す地図だそうです。スイス中、ヨーロッパ中から彼女のもとにいろんな病を持った人が行って、この技法だけでずっと治療してた。これは当時もちろんアートとして考えられていなくて、90年代になって、美術館がエンマ・クンツは作品としてもすごいということで、美術の文脈にスライドしてきたという感じです。完全に、芸術的な表現なんだけど役割としてはアート鑑賞ではなくて、ヒーリング。病を和らげる道具ですね。

## ミュージアム・オブ・トゥギャザー展

最後に、去年やった「ミュージアム・オブ・トゥギャザー」展(*25)を少し。「読む」「作品をどう解釈するか」「言葉にしていくか」という話から言いますと、キャプションの問題はキュレーターとしては大きいですよね。作品をどこまで代理的に説明するべきなのか。説明するのであれば、どういう言葉で説明するのか。たぶん、スタンダードなやり方は美術史の言葉を多くのキュレーターたちは使うと思うんです。

作家のバックグラウンドを少し書いて、作品の特徴をちょっと書いて、素材が面白かったらその特徴を書いてみたり。すごい美術史的な言語、書き方というのは定まっていると思います。でも今回、多くの作家たちは施設で描いていたりとか、自宅で描いていたりとか中には現代美術作家もいたりして、すごくさまざまな場で描いている人たちがいました。その多様な状況をどうやって言葉として落としていけるのか、というすごい面白いチャレンジがあったんです。結局ひとつ至ったポジションは、会場の作品の横には説明キャプションは無し。ただ、作品名、作家名、素材名はベーシックな目の前にあるものは何なのか、作品名は何なのかだけにして。無料でハンドブックを作ったんです。そのハンドブックの中に、各作家に2ページずつ設けて、そこにキュレーターたちが書いた短い文章、そして展覧会をつくる上でさまざまな人の制作場所を訪ねたのでその制作場所の写真を載せようということですね。

何故かというと、「ミュージアム・オブ・トゥギャザー」展の半分以上のアーティストたちは直接喋れなかった。結果的に出てきたひとつのプロポーザルは、作家に会いに行く、制作現場に行くっていうことでした。そこで話せる人は話した、話せない人は観察する、お菓子を食べた、お母さんと話をした。その事実を淡々と旅日記のように書いていこうというスタンスを取ったんですね。それがハンドブックに23人分あって、自分が読みたければ読む。読みたくなければ、家に帰ってから読める。どうしても作品の横のキャプションというのは、そこを最初に見ちゃうという傾向が特に最近強いと思います。その作品を見る前に、説明を読んじゃうみたいな。その辺も少し違う方法でやってみましょうかという実験が、こういう形で出てきました。

あとはもうひとつこの展覧会でちょっと変わったことをやったのが、キュレーターとして、約2年くらいいろんな調査旅行とか、施設を訪ねたりとかしてて。展覧会をつくる側の調査のさまざまな材料とかは表に出てこないと思うんですけど、展示をしましょう、した方がいいんではないかという考えがありました。そこで、我々が参考にした文献とか、作品精緻をしてたときに、すごい参考になってた美術史的な参照作品とかをセレクションして、キュレーターの壁というコーナーもつくってみたんです。

今日のお話でしてきたようなことも、ミュージアム・オブ・トゥギャザーをつくる上で考えていて。作品そのものを道具として考えられないかと。その道具性、有用性と言いましょうか。多くの、障害のある作家さんにとって作品づくりというのは、すごく必要な行為であったりする。でも現代美術作家も毎日何か描かないと、イライラするという声も聞いたし、アーティストにはすべて共通の、何かをつくる衝動、意欲みたいなものがあるのかなという見方もできます。作品ひとつひとつが見る側にとっても、もしかして気持ちがおさまったりとか、精神的に安定するみたいな、結果をもたらす。あるいは、もう一個レベルが上に行くと、展覧会そのものが道具として提供出来ないかということも意識しました。なので、作品群としても、有用性として考えられないかという感じです。

── 来場者とのセッションの前に、改めて「アートを読むこと」について

**ロジャー**:実はこのお題が武捨くんから来た時に考えていて「アートを読むこと」とはアートの中ではひとつの幻のクエスチョンだと思ったんです。作品を言葉抜きで見たい欲はありますよね。でもそれって、本当にあり得るのか。多分20世紀の中ではあり得ない、脳科学の最新研究から見ても言葉で我々は現実のマッピングを常にしているので。言葉抜きで見るという経験はないんじゃないかっていうのは、メインストリーム化してると思うんですよね。でも言語がない見る体験って、ひとつの幻の体験として未だにアートの深いところにあるような気がします。

**武捨**:例えば、作品の良さとか面白さを伝える時にやっぱり言葉に頼ざるを得なくて、ただ作家の気持ちに感情移入すると言葉じゃないよと思っているんです。けど、そう言っちゃうと、伝わらないことが零れ落ちちゃうことがすごくたくさんあると思っています。

**ロジャー**:たぶん、西洋の美術史を眺めると、まさに読むにふさわしく、言葉というものがすごく大事だったと思うんですよね。言語に置き換えるという作業が非常に重要で、すなわち歴史化できる。でも例えば、古典インドの美学をちょっと眺めると、全然違うレベルの美学史が書いてあるんですよ。古典インドの美学というのは、感情美学。アーティストの役割は微妙な感情のミックスを引き出せるように、音楽を奏でるとか、絵を描くとか。だからそれは、身体ベースというかな。重みがちょっと違うところにおかれている感じ。

**武捨**:アウトサイダーアートの人の中には、ものすごい自分の世界観でがっちり世界を組んじゃっている人がいらっしゃると思うんです。例えばヘンリー・ダーガーとか。その人の中ではこれがこの世界だとなっていることがすごいなあと思って。そういう作品に出会ったときに、作品自体が読み物でもあり、その背景にある作家について読めば読むほど面白さがそこに出てくる。やっぱり読むっていうテーマは有効ではないかなぁと思っていて。

**ロジャー**:アートという人間が約4万年前から洞窟の奥深いところでコツコツやってた、いわゆる人間のもっともある意味古いひとつの行動、行為、アクティビティとして見ると誰かが何かを、描くとか形につくるということは4万年の巨大なフィールドの中で起きているといつも思うので。

無関係と思われるものを、いろんな想像の世界で関係づけるという、非常に面白いアクティビティが錬金術的であったりとか。だから読むといったときに、幅広い4万年の美術の行為の中からいろんなものを読み取る力というか、そういう態度を美術館はもっともっと欲しいなぁと思います。

**武捨**:読む力というか、読もうと思う意思というか、何かそれが間違った解釈になったとしても読む意志は大事かなぁと思ったりしています。作品を見るときにわたしたちはどんなことから始めたらいいのか、ヒントやアドバイスが教えてもらえますか。

**ロジャー**:ひとつは鑑賞という体験、瞬間をもう1回自分の中で考え直すということが、すごく大事な気がしますね。何かに10秒以上集中しないような仕組みがどんどんできている気がしてて。アートは10秒では見れないんだよね。15分、30分、1時間とか見るほど、何かがそこから漏れてきたりとか。じっくりそこに時間を費やすという経験だけからも、想像してなかったものが十分出てくると思いますね。

たぶん15分くらい経った段階から、作品から自分に何か逆に来る瞬間があったりすると思います。自分がいかに作品に降伏できるか。時間とかひとつの面白いところって、自我が少し静かになる時間ができるので。その空間の中で降伏感みたいな、お手上げみたいな感じが出てくると逆に作品がこっちに迫ってくるみたいな。そこから出てくる知恵とかってなんだろうってすごく面白いよね。

── ここからは会場のお客さんとの質問形式でのセッションです。

**質**:作品と向き合うと未知のものというか、そこに不安感があって。それを自分の知っているものにしたいと思って言語化したり。キャプションを見て、正解を知りたくなるとか。自分の中の体験で、作品を位置づけようとしてしまっている感じがします。

**ロジャー**:特に現代美術の作品って、見てわからないものが多いじゃないですか。そういう作品の前に立った時にね、理解が追い付かない、なんだこれみたいな。データベースに比較するものがない。実は19世紀から、こういう問題に考えさせられていて。僕がいつも参照するのは、キーツというイギリスの詩人がいるんですね、ロマン派の詩人。彼もこういうことってすごく美術鑑賞に大事な瞬間だって言ってるんです。

彼は詩人なので詩に対して言ってるんですけど、ネガティブ・ケイパビリティと言ってるんです。いわゆる、ネガティブな感情に対するキャパシティーがどのくらいあるかによって芸術鑑賞の質が全然変わると。彼が提案してたのは、まったく理解できないとなった作品の前にどのくらいのキャパシティーを自分の中で持てるか。

**質**:どんどん集中力が、短くされる環境が出来上がっていくなかで、すぐキャプションを見たくなる人が増えていく。より権威の、これが正解だよという方にどんどん向かっていっちゃうのかなぁと感じました。

**ロジャー**:報道とかもニュースとかも、自分で何か探るという人は、ほんの一握りだと思うんですよね。だからみんな、ヘッドラインを信じちゃうという時代でもあるしね。日本も今、オリンピックが来て多様性とか言ってるんだけど相当表面的だと思う。

ビックデータを使って、大勢の人がやった似たような行為があなたのところに来るというアルゴリズム設定じゃない。だから、すごくある意味では真ん中あたりにすべてが来るようになっている仕組みだよね。SNSであったりとかね。

ただ座って息をして何かをみる、あるいは何もしないでただ座る。これは宗教的に言うと瞑想っていうことになるかもしれないけど、アートの文脈で言うとじっくり鑑賞とか集中して、何かを見る、聞くという美学的な体験にもなりうる。それって本当にお金もかからないし、唯一時間がかかるんです。時間は、ほんとに今はプレミアムじゃないと。みんなが我々の時間を奪い合おうとする時代でもあるので、いかに「No」と言えるか。

美術業界では、観客動員とかマーケティングで行くんだったら、完全にSNSに乗るしかないですよね。となると、ますます作品をみなくなるから。でも一方では、作品コレクションをちゃんと見てほしい。なんらかの学びというものに軸で置くのであれば、そういうものを規制するというところもある。うまく共存できるかわからないけど。

わたしがやっているフェンバーガーハウス(*26)は、それに対してひとつのやり方を出していて。予約制の訪問にしていて、来ると6時間。ランチが出て、ティータイムがあって、いろんな自由時間があれば、ガイドツアーの時間、音楽鑑賞の時間。特に都会から来てくれるお客さんは、最初の2〜3時間のイライラ感がすごくわかるんです。ずっと携帯みたりとか。ランチ食べてレコードを1枚聴いた後くらいから、だいたい8割の人は寝たりとか本読んだりとかで、帰るときになると「ああ、もう帰りたくない」と、体のリズムが心拍数がもしかしてマッチしたとか。そういうやり方もあると思うんですよね

**武捨**:お話をお聞きして、多様性と言ったときにその「向こう側」にあること、それが読むという、作品になっているものの背景にある言葉とか意味を拾ったりとかすることで、広がっていく。そんな話にもつながるのだと感じました。

**ロジャー**:ありがとうございました。

講師プロフィール

### ロジャー・マクドナルド 氏

（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ［AIT/エイト］副ディレクター）

1971年生まれ。イギリスのケント大学にて宗教学修士課程修了後、美術理論にて博士号を取得。博士号では、『アウトサイダー・アート』（1972年）の執筆者ロジャー・カーディナルに師事し美術史を学ぶ。1998年より、インディペンデント・キュレーターとして、国内外で数々の小規模な展覧会を企画。2006年の第一回「シンガポール・ビエンナーレ2006」では、キュレーターとして活動。2010年に家族と長野県佐久市に移住し、2013年に個人美術館フェンバーガーハウスをオープン、館長を務める。興味は美術史、絵画、編成意識状態、オーディオ鑑賞、チャツネ、山。自称、インディペンデント研究者。AIT副ディレクター。

---

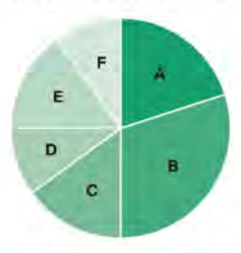
*1 広義では、伝統的な訓練を受けていない人が制作した作品であるが、アートとして扱われているもの。アールブリュットは、フランスのジャン・デュビュッフェがアール・ブリュット(生の芸術)と呼び強迫的幻視者や精神障害者などの作品のことを指し、アウトサイダー・アートはイギリスのロジャー・カーディナルが社会の外側に取り残された者の作品で、美術教育を受けていないと指摘している。
*2 イギリスの詩人、思想家、デザイナーであるウィリアム・モリスが主導したデザイン運動。
*3 アルフレッド・バー・Jr(1902 - 1981)ニューヨーク近代美術館(http://www.moma.org/)初代館長。「キュービズムと抽象美術」(1936年)展覧会のカタログに過去50年の美術の歴史を図式化し「系統図」を作成し掲載した。
*4 ジャクソン・ポロック(1912 - 1956)。20世紀のアメリカの画家。抽象表現主義(ニューヨーク派)の画家。
*5 ジョン・コンスタブル(1776 - 1837)。19世紀イギリスの風景画家。
*6 ミシェル・フーコー(1926 - 1984)。フランスの哲学者。代表作は『狂気の歴史』(1961)『言葉と物』(1966)『監獄の誕生』(1975)『性の歴史』(1976 - 2018)など。
*7 ジュディ・シカゴ(1939 - )。アメリカのフェミニスト美術家、教育者、作家。1970年代初期、アメリカのフェミニスト美術運動において中心的な人物。
*8 1989年、ポンピドゥー・センターで開催。J=H・マルタンによる企画。「20世紀美術におけるプリミティヴィズム」展(MoMA, 1984)での企画展が議論を呼んだことが背景となっている。
*9 詳しくは講師のロジャー・マクドナルドさんがインタビューした記事を参照。https://www.diversity-in-the-arts.jp/stories/2003 、https://www.diversity-in-the-arts.jp/stories/1983 、https://www.diversity-in-the-arts.jp/stories/2486
*10 人を肉体と霊魂で構成されていると考え、肉体がなくなっても霊魂は存在し、生きている人と死者が霊(霊魂)と交信できるという考え方やその思想や哲学。また実践が伴うこともある。
*11 日常的な意識以外、普段生活している意識の状態と異なる意識の状態のことを指す。
*12 土着・風土的な土地固有の文化から生まれた表現や作品で、農業、商工業などの労働者によって生み出される手工芸品を含む。
*13 クリスチャン・リース・ラッセン(1956 - )。アメリカ合衆国の画家。「マリンアート」と呼ばれる海中風景やイルカなどの海洋生物を主要なモチーフに、海洋の自然を描いている。
*14 ハンス・プリンツホルン(1886 - 1933)。ドイツの精神科医。1922年に、精神病患者が作った作品を選別・収集してまとめた『精神病者の芸術性』を出版。
*15 ヴェネツィア・ビエンナーレ財団が主催し、イタリアのヴェネツィアで1895年から開催されている現代美術の国際美術展覧会。2年に一度、奇数年に、6月頃から11月頃まで開催。ビエンナーレとはイタリア語で「2年に一度」のこと。
*16 https://www.musevery.com/
*17 アーツ・アンド・クラフツ運動は、ウィリアム・モリスが主導し1880年代から起こったデザイン運動・美術工芸運動。
*18 ジョン・ラスキン(1819 - 1900)。19世紀イギリス・ヴィクトリア時代の評論家・美術評論家。代表作は『近代画家論』(1843 - 1860)『建築の七燈』(1849)『ヴェニスの石』(1851-1853)
*19 ウィリアム・モリス(1834 - 1896)。19世紀イギリスの詩人、デザイナー、マルクス主義者。「モダンデザインの父」と呼ばれる。『民衆の芸術』(1879)という講演を行った。代表作は『ジョン・ボールの夢』(1888)『ユートピアだより』(1890年)
*20 島崎 藤村(1872 - 1943)。日本の詩人、小説家、自然主義作家。代表作は詩集『若菜集』、小説『破戒』『春』など。
*21 山本 鼎(1882 - 1946) 。日本の版画家・洋画家・教育者。代表作は、木版画「漁夫」(1904)、「デッキの一隅」(1912)、著書として『油絵の描き方』『自由画教育』『図画と手工の話』など。
*22 山本鼎が1918年に日本創作版画協会を設立し自由画教育運動を展開。全国の教育現場で迎えられた。子供の個性や創造性を尊重し、欲するままに描かせる絵画を目指した。小学校低学年児童用の画材としてクレヨンが有益なことを唱導し、自由画教育の普及と併行してクレヨンは全国的に普及も行った。
*23 アンリ・マティス(1869 - 1954)。フランスの画家。
*24 エンマ・クンツ(1892 - 1963)。スイスの心霊療法士、研究者。「1m × 1m の方眼紙に色鉛筆やクレヨンで描かれた幾何学図形」(DIC川村記念美術館ウェブサイトより)を400点以上制作した。
*25 「日本財団DIVERSITY IN THE ARTS 企画展 ミュージアム・オブ・トゥギャザー」 2017年10月13日 - 31日、スパイラルガーデン
*26 講師のロジャー・マクドナルドさんが運営する、長野県佐久平にあるロッジを改装しプライベートミュージアム。

---

リベルテアーツカレッジ 2018 PART2 障害のある人の表現と作品の読み方【読むこと】

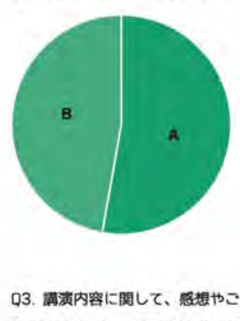
## 障害のある人の表現と鑑賞をめぐる連続講演に関するアンケート

Q1. 今回、リベルテ アーツカレッジが開催されることを何から見聞きして知りましたか。（複数回答可）



| | | |
|---|---|---|
| A | チラシ | 4 |
| B | リベルテのSNS（ツイッター、フェイスブックなど） | 6 |
| C | 知人やフォローしている団体のSNSやウェブサイト | 3 |
| D | 友人や知人など | 2 |
| E | リベルテスタッフから | 3 |
| F | その他<br>（フェイスブック/メンバー） | 2 |

Q2. 今回の講演内容について、あてはまるものを丸で囲んでください

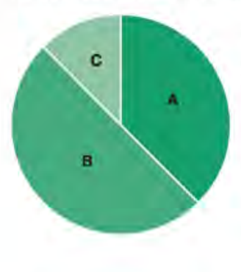


| | | |
|---|---|---|
| A | とても満足 | 9 |
| B | 満足 | 8 |
| C | ふつう | 0 |
| D | 少し不満 | 0 |
| E | 不満 | 0 |

Q3. 講演内容に関して、感想やご意見をご自由にお書きください

精神病の治療にアートが有効であることを知り、参考になりました。/「障害がある人の…」というタイトルであったが…そのあたりの話をもっと深く聞きたかった/現代人と時間について議論してみたい/「障がい者」という単語の提示が鑑賞者の「よみかた」をどこまで変えてしまうのか/難しかった（アートに詳しくないもので…）/ロジャーさんのお話を聞けてとてもわかりやすくなるほどと思いました。また聞きたいです。/テーマも内容もとてもよかった/ひさしぶりに狭い精神科病院の世界から外に出て空気を吸った気がしました。アール・ブリュットはヘンリー・ダーガーのドキュメントを20歳くらいのときに見てからなんだか心が惹かれてずーっと観てても飽きないなと思っていまに至ります。途中から（waht dose art do?のくだりくらい）アートやそのアーティストを捉える視点がクライアントと呼ばれるいつも目の前にいる人にすり替わっていきました。シビックリカバリーセンターの話をもっと聴きたかったです。Negative ケーパビリティは数年前に精神科医療の中でも少し流行りました。/30分集中して絵を見ること!!何かに集中することで読み解く力がつくかもしれないこと!!やってみたいです!!

Q4. 今回の表現やアートを「見ること」についての講演の内容でもっと深掘りして聴いてみたい内容などありますか？

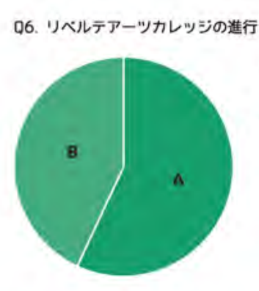


| | | |
|---|---|---|
| A | 深掘りして聴いてみたいことがある | 6 |
| B | もし続きがあるなら聴いてみたい | 8 |
| C | わからない | 2 |
| D | この内容は充分だ | 0 |
| E | 興味がない話題だった | 0 |

Q5. もし深掘りして聴いてみたい内容があれば教えて下さい

「アートを読む」ということがよくわからないな。/ケーススタディー/時間の流れの早さによって見えているもの見え方が変わっていく/精神病患者の世界観アートについて/心拍数を落ち着かせること

Q6. リベルテアーツカレッジの進行についてお聞きします。今回の企画の進行はいかがでしたか？

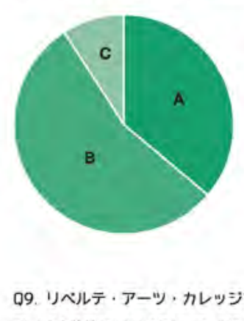


| | | |
|---|---|---|
| A | とても良かった | 8 |
| B | よかった | 6 |
| C | わからない | 0 |
| D | 良くなかった | 0 |
| E | 全くよくなかった | 0 |

Q7. 上記を選んだ理由や今回のリベルテ・アーツ・カレッジについての感想などあればお書きください。

アートに弱い私でもある程度ついていけました。/また来ます!!/ロジャーさんが企画したスパイラルの展示についての内容は自分の仕事の関係で面白かった/ 質疑応答の時間がもっと欲しかったです。/これからもいろいろやってください/身近でこうした質の話がきけるってうれしいです。どうもありがとうございます。/安心して聴く（内的対話）ことに専念できました。/とてもいい時間でした♪ありがとうございました!!

Q8. リベルテアーツカレッジPART2の講演も予定しております。参加したいと思いますか。



| | | |
|---|---|---|
| A | ぜひ参加したい | 4 |
| B | 企画による | 6 |
| C | わからない | 1 |
| D | 参加したくない | 0 |

Q9. リベルテ・アーツ・カレッジで取り上げてほしい話題やイベントがあればお書きください。

アートと身体性にかかわること アートについての対話を中で輪になっている人がして、何を想ったか対話するみたいな時間があっても…

## まとめ

今回のリベルテアーツカレッジでは中津川さんとロジャーさんの講演を通じて、障害のある人がつくった作品や表現を解きほぐすためのヒントが沢山あったのではないかと思っています。

福祉施設での展示会を行うと「障害があるけどがんばってつくった」「障害があるけど上手だね」という感想を頂くことが多いです。枕詞のように「障害があるけど〜」とついてしまうことの違和感もあります。と、同時に「頑張っている」「上手だ」という言葉が発露する前に感じた通りとして、何に心を動かされたか？ ということにも関心があるのです。その感想が、鑑賞者の内から外に出てこないのは「障害」というものについての距離感が上手くつかめない、関係をつくる機会が少ない社会なのかもしれません。しかしもし「作品」として多くの人の目に触れる可能性がある出会いが増えているとしたら、改めて作品との関係の中で、鑑賞者の抱く「障害」のイメージと向き合い相対化できるような機会になるということでもあります。また芸術文化に触れ、作品を通じたコミュニケーションに繋がることもあるかもしれません。それは現代アートに対しても同じようなことが言えるかもしれません。

例えば、今村花子の「自閉症の娘の食べ残しを並べ、それを母親がカメラで食事ごとに撮影した写真」(※1)は、実は本来「作者」とされる娘にとって「作品」として「制作」されているかどうか、本人の口から語られることはありません。写真を淡々と撮影し続けたのは母親でした。このような表現なのか行為なのかわからない作品未満のもの、作者や作品がだれなのか、だれのものなのか未分化なものが、障害や高齢者、社会的に「マイノリティ」とされる人の「芸術」活動では生まれてくることがあります。アール・ブリュットやアウトサイダー・アート(※2)も注目されてきています。同時に、エイブル・アート(※3)のような運動としての広がりや、認定NPO法人クリエイティブサポートレッツが提唱し実践する「表現未満、」(※4)のような新しい表現として、「障害者アート」が日本中で同時に起こっています。

こうした「障害のある人の表現をめぐる」と言っても様々なものがあり、今回の講演で多様な表現の一端を紹介して頂きつつ、様々な作品を通じて深くも広くもなっていく感性の世界を、興味や関心を持っていただく機会にリベルテアーツカレッジがなったのではないでしょうか。

最後に、講師の中津川さんとロジャーさんには「見ること」「読むこと」というシンプルでどこまでも深く広く話せるテーマの中で、鑑賞を通じて自分の感動に出会うことや、作品が生まれる社会や歴史の存在とまた歴史化されない文化があることを、限られた時間の中でお話して頂きました。ありがとうございました。この先もリベルテアーツカレッジをきっかけに、街の中で行われているアートや文化芸術に興味関心を持つ人が増えるような機会をつくる媒体づくりを試みたいです。

特定非営利活動法人リベルテ　理事長　武捨 和貴

---

※1 映画「花子」:佐藤真、2001年、シグロ http://www.cine.co.jp/hanako/index.html
※2 アール・ブリュットやアウトサイダー・アート:広義では、伝統的な訓練を受けていない人が制作した作品であるが、アートとして扱われているもの。アール・ブリュットは、フランスのジャン・デュビュッフェがアール・ブリュット(生の芸術)と呼び強迫的幻視者や精神障害者などの作品のことを指し、アウトサイダー・アートはイギリスのロジャー・カーディナルが社会の外側に取り残された者の作品で、美術教育を受けていないと指摘している。
※3 エイブル・アート:アートを通して、だれもが豊かに生きることのできる社会を実現を目指し、「エイブル・アート・ムーブメント（可能性の芸術運動）」を提唱して、アートの可能性や人間の可能性を再発見する活動やその理念のこと。
※4 「表現未満、」:NPO法人クリエイティブサポートレッツの2016年から行ったプロジェクト。https://miman.hamazo.tv/

LIBERTE

リベルテアーツカレッジ 開催概要
障害のある人の表現と鑑賞をめぐる連続講演
リベルテアーツカレッジ2018

リベルテアーツカレッジ 2018.07.22
障害のある人の表現と作品の読み方【見ること】
── アートを見るってどういうこと!?

講　演　障害のある人の表現と作品の読み方【見ること】
講　師　中津川 浩章 氏（美術家）
実施日　2018年7月22日（日）
時　間　14:00〜17:00
場　所　犀の角（上田市中央2丁目11-20）
参加者　28名
参加費　2,000円

リベルテアーツカレッジ 2018.09.22
障害のある人の表現と作品の読み方【読むこと】
── アートを「読む」!? それって何だ？

講　演　障害のある人の表現と作品の読み方【読むこと】
講　師　ロジャー・マクドナルド 氏（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト] 副ディレクター）
会　期　2018年9月22日（土）
時　間　18:00〜21:00 途中休憩有り
場　所　犀の角（上田市中央2丁目11-20）
参加者　26名
参加費　2,000円

協　力　リベルテFC
撮　影　村上圭一（カラーボックスパブリッシング）
後　援　上田市、上田市教育委員会、信濃毎日新聞社

企　画　特定非営利活動法人リベルテ

本書の一部あるいは全部を無断で利用（コピー）するには、著作権法上の例外を除き、著作権者の承諾が必要です。